

在地の技術の「発見」ーバングラデシュとミャンマーでの 2017 年夏のフィールドワークよりー

京大東南アジア地域研究研究所安藤和雄

バングラデシュのエンジン・リキシャ

2015 年 10 月のロングプール県での日本人殺害事件以来、日本人を標的とするという声明が IS 関係のグループからだされた。それを受けて、バングラデシュでの日本人国内での移



動は帰省され、青年海外協力隊員も活動を中止し、隊員は引き上げをよぎなくされた。フィールドワークも休止せざる負えなく、私も 2015 年 10 月以来自分のフィールドの地方都市を訪れていない。今回約二年ぶりに地方都市を通過し、マイメンシンの街にあるバングラデシュ農業大学を訪れることができた。その道々であったのが「エンジン・リキシャ」である。エンジン・リキシャと

名前であるが、実際は、バッテリーと小型モーターが搭載されたリキシャである。大変簡易である。従来のオート三輪とはまったく異なり、日本の電動自転車の延長にあるのがエンジン・リキシャである。結構のスピードが出るようで、ブレーキなどの問題があり、乗客の死亡事故も起きているようだ。議論百出となっているようである。私が地方都市にでかけなくなって 2 年間であるから、この 2 年間にこのエンジン・リキシャが登場したことになる。ダッカではリキシャ自体が締め出されていることや、エンジン・リキシャは禁止されているようなので、見かけることがなかった。このエンジン・リキシャが、すでに数年前から導入されている中国製の電気三輪車のオート・リキシャと異なるのは、自転車の三車リキシャに改良を加えている点で、明らかに、ローカルな知恵が作ったもので、この背景にあるのは、小型モーターやバッテリーの部品調達が容易になったことが考えられる。まだまだ改良が加えられることだろうが、このエンジン・リキシャの登場で、年齢をいったリキシャひきが可能になったことや若者のエンジン・リキシャで稼ぐ者が増加したのではないか、という意見を私のバングラデシュ農業大学の友人から聞いた。エンジン・リキシャはバングラデシュのまさに「在地の技術」の一つの典型だと言える。

ミャンマーの Drum Seeder

ミャンマーの Maubin Township の A 村はイラワジ・デルタの氾濫原に立地していて、この村では、雨季の稲作と乾季の豆 (ケツルアズキ) の二毛作が盛んである。雨季の 9 月に A



村を訪問すると、高みの田 Le の田ではまだ出穂前の稲が育ち、主にヒエの手取り除草が行われていた。育っている稲は、並木植えのように、きちんとラインができていたので、てっきり移植栽培がされているものばかりだと思っていたが、訪問した農家の高床の床下にプラスチックでできた Drum Seeder があった。農家に聞くと、この Drum Seeder で点播種しているという。この播

種作業は 6 月中旬から下旬、一日水浸した種粃を水を切り一日日陰で藁につつつんで加温

して催芽する。発芽した種籾を **Drum Seeder** で水を入れて代掻きの終わった田に人が歩いて **Drum Seedr** を引っ張りながら播種していく。この技術はこの村に 2 年前に政府の普及局と **IRRI** が共同で導入している。恐らく、道具は簡単な構造でもあり、恐らく在地化していく技術ではないかと予想される。